

# 綱領をよりどころに教師間で指導を 共有し、生徒に高い志を持たせる

青森県立八戸高校は県内屈指の進学校であり、生徒の多くが憧れを抱いて入学してくる。学校を誇りに感じる気持ちが高い志につながる指導によって、高校生活のあらゆる場面に主体的にかかわろうとする生徒が育っている。

## 学校の原則である綱領を 全ての教師・生徒が共有

2013年度に創立120周年を迎えた青森県立八戸高校は、毎年、東京大を始めとする難関国公立大の合格者を多数輩出する県内有数の進学校だ。保護者や地域からの期待は大きく、生徒は「憧れの『八高生』になった」という誇りを抱いて入学する。同校では、そうした生徒の自負心を刺激して意識を高め、人間的な成長を促すことを、生徒指導の方針としている。

入学時に配布される『八高生活のしおり』の第1章の冒頭に書かれている言葉は「Noblesse Oblige」。フランス語であり、「高貴な身分に伴う義務」という意味だ。地域社会や日本のリーダーとして将来を嘱望される生徒に強く意識してほしいこととして、この言葉の意味を入学式で説明する。更に、入学時に伝えるのが、教育活動の原則として同校に脈々と受け継がれている3つの「綱領」だ。

### 一、**須ク自重スヘシ**

八高に学ぶ者として、自信と誇りを持って、自らを任じ、自らを重んずること。自分の可能性を信じる

同時に、その誇りを傷つけるような品位を欠く行動や考えは自分自身に対して恥ずかしいことである。

### 一、**唯本分ニ向ツテ猛進セヨ**

各々の「Noblesse Oblige」に向かって敢為、堅忍の精神で当たること。本校に学ぶ者への地域の期待と愛情を感じ取ってほしい。

### 一、**師ヲ敬シ 友ヲ愛セヨ**

教師に生徒を愛する情熱があり、生徒に教師を敬う心があつて初めて教育効果がある。高い理想に向かって友人同士が助け合いながら猛進する時、教師と生徒の間に師弟同行の精神が育つ。

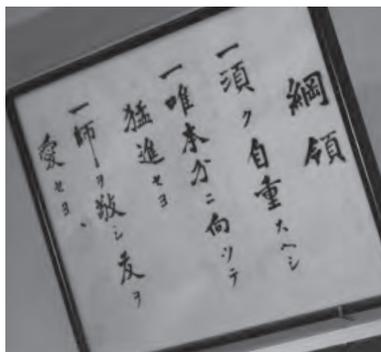


写真 全ての教室の黒板の上には、綱領が掲示されている。生徒には、日常的に言動を綱領に照らし合わせて考えるように促している

綱領は、学習指導や生徒指導の原点であるとし、入学時に生徒や保護者にもその意図や内容を詳しく説明し、教室の黒板の上に掲示している（写真）。日々の指導でも、教師は事あるごとに綱領を口にするため、い



青森県立八戸高校  
**中村まり子** なかむら・まりこ  
教職歴30年。同校赴任歴9年目。進路指導主事。「仕事をやる女性としての見本でありたい」



青森県立八戸高校  
**嶋雅樹** しま・まさき  
教職歴29年。同校赴任歴7年目。1学年主任。「生徒とのつながりや信頼感を大切にして絆を深める」



青森県立八戸高校  
**種市朋哉** たねいち・ともちか  
教職歴26年。同校赴任歴7年目。2学年主任。「自信と勇氣、正義感を持ち、社会貢献できる人を育てたい」



青森県立八戸高校  
**清川和幸** きよかわ・かずゆき  
教職歴27年。同校赴任歴4年目。3学年主任。「夢を持ち続け、気配りが出来る生徒を育てたい」

**青森県立八戸高校**

◎1893（明治26）年、青森県尋常中学校八戸分校として開校。自由と自主性を掲げ、部活動や生徒会活動も活発。「文武両道」を実践する生徒の育成を目指している。

◎形態／全日制、普通科、共学

◎生徒数／1学年約280人

◎13年度入試合格実績（現浪計）／国公立大は、東北大、東京大、京都大などに167人が合格。私立大は、慶應義塾大、中央大、明治大、早稲田大などに延べ269人が合格

◎住所／青森県八戸市長者4-4-1

◎電話／0178-14410916

◎URL／<http://www.sanpachi-n.asn.ed.jp/~h/>

つの間にか暗誦できるほど、生徒に浸透していく。2学年主任の種市朋哉先生はこう語る。

「私は1つめの綱領が最も大事だと捉えています。自分を大切にすることは、他者の存在を大切にすることにつながると思うからです」

綱領は、教師にとって教育活動の方針を共有する原点となる。3学年主任の清川和幸先生はこう話す。

「学年経営方針には綱領の意図が反映され、綱領を踏まえて具体的な教育活動を検討します。指導に迷いが生じた時は、綱領に立ち返って考えるようにしています。ですから、教師によって指導に大きなずれが生じるようなことはありません」

**掃除、挨拶、時間厳守の意味を深く理解させる**

同校の生徒指導における重点指導事項は「掃除」「挨拶」「5分前」だ。これらは学校活動をスムーズに進めるルールであると同時に、生徒の人間性を高める指導でもある。生徒に

は、次のような説明をする。

◎**掃除** 古来、東洋で行われてきた人間修養の手段であり、身の回りを清潔に保つことが、公共物を大切にしている、自分の学校に誇りを持つことにつながる。自分が使用しない場所も掃除することによって、相手思いやる心が育つ。

◎**挨拶** 校内の雰囲気をやかにして、学習環境を整えるものであり、将来、国際社会を生きるためのパスポートとなる。

◎**5分前** 時間を守ることは社会の最低限のルールであり、組織のモラルの維持にもつながる。遅刻厳禁はもちろん、授業などでは所定時間の5分前には移動を終え、気持ちを整えて待機することが大切である。

項目の意味を理解した生徒は、単にルールを守るだけでなく、自分の行動に責任を持ち、より良くするための方法を考えるようになるという。例えば、ある掃除の班がゴミの分別に時間が掛かり、焼却炉に入れる時間に間に合わないことがあった。生徒は「どうしたら分別を早く

終えられるか」を話し合い、役割分担を決めて効率化を図ることで、その問題を解決した。

ただ、「5分前」は徹底が難しいと1学年主任の嶋雅樹先生はいう。

「掃除と挨拶は、1年生から一生懸命に取り組む姿が見られますが、5分前はなかなか守れない生徒がいます。守れない生徒を見かけた時には、全教師のルールとして、担任だけではなく、気付いた教師がその場で指導します。『時間を守ることは、相手の存在を尊重することだ』と、時間厳守の根本的な意味を根気よく説明していくと、生徒の行動は次第に変化していきます」

一方、教師が授業開始時間に遅れた時などは、生徒に謝罪する。生徒にルールの大切さを指導する以上、教師はその手本として、襟を正すことも大切に行っている。

**高い志があれば 自ずと規範意識が育つ**

髪形や服装などの日常生活にかか

わる生徒指導は、個別に行うことはあるが、全体的な指導はしていない。生徒は、入学当初から学習や生活の基本姿勢が身に付いており、指導があまり必要ないこともあるが、それ以上に、高い志を持たせる指導によって生徒の規範意識が自然に高まっていく面が大きいという。

生徒の肉体的な成長を促し、志を高める機会として重視するのは2者面談だ。どの学年も年5回ほど行い、学習指導と合わせて生徒指導の場としている。種市先生はこう語る。

「どの生徒も『もつと成長したい』と期待を抱いて入学しますが、授業が難しくなり、交友関係が広がる中で、周囲に流されたり、自分を見失ったり、混乱したりすることがあります。教師は生徒と一対一でじっくり向き合い、生徒が自分で答えを見付けるのを待ちながら、話を聞くことに徹しています」

1年生の面談では、生徒に夢を語らせながら、学ぶ意味を問い、将来のイメージを膨らませることに重点を置く。例えば、将来就きたい仕事を尋ねた時、「人の役に立つ仕事がいい」と答える生徒が少なくない。

具体的にどのような役に立ちたいのかを聞くと、「人の役に立つとは、人の命を救うこと。だから医師を目指す」と限定的なイメージを語る生徒が目立つという。

ここで、教師は「人の役に立つことは命を救うことだけか」と問い掛ける。そうしたやりとりを続けるうちに生徒の視野が広がっていき、やがて「全ての仕事が生徒の役に立つもの」だと気付くという。そうして改めて、自分が何に関心があり、どのように人の役に立てるのかを、生徒に問い掛ける。

「生徒が自分の生き方を真剣に考えて出した答えが土台となって、志が育つのだと思います」（嶋先生）

### 生徒主導の学校行事でリーダーシップを実践

高い志を持たせる指導としてリーダーシップの育成にも力を入れる。

「本校には、中学校でリーダー的な存在だった生徒が多くいます。将来的にも、人を引っ張ったり、まとめたりする役割を担いたいという思いを持っています。全ての生徒に

リーダーとしての心構えを身に付けてほしいと考え、1年生からリーダーシップの大切さを説くなどして意識を高めています」（清川先生）

集会では、人をまとめるためには、周囲への気配りや相手を思いやる思慮深さが不可欠といった心構えなどを繰り返し説く。また、面談では生徒の課題を踏まえ、その時々々にチャレンジすべきことを確認する。

生徒が実際にリーダーシップを発揮する機会が、さまざまな学校行事だ。中でも、7日間かけて、文化祭、体育祭、球技大会、後夜祭を実施する「八高祭」は、生徒主導で企画・運営を進める。教師はほとんどかわらず、3年生のリーダーシップが試される場となっている。

八高祭では、全校が縦割りの4グループに分かれ、3年生を中心とした執行部の生徒が各グループを引っ張っていく。3年生は、1・2年生に対して「この期間は燃えるぞ」と気持ちを高めると共に、役割分担を決めて指示をするなどしてイベントをつくり上げていく。進路指導主事の中村まり子先生は、その時の生徒の様子を次のように話す。

「本校に赴任した時、八高祭の運営は生徒が全て行うと聞き、驚きました。大きなイベントですが、教師がすることはほとんどありません。生徒はたくさん問題にぶち当たりますが、『教師の手は借りない』と強く意識しており、自分たちで解決します。なぜ、本校の生徒にはそれが出来るのかを考えると、『自分たちだけで絶対にやり遂げる』と生徒たちが本気で取り組み、更に、教師が生徒を信頼して全てを任せているからだと思います」

### 受験勉強で支え合い人間関係の大切さに気付く

生徒には、社会貢献の意識を持つ大切さも、「Notesse Ojige」という言葉と共に伝えていく。その土台となるのが、周囲の人々を思いやる中で築く深い人間関係だ。ただ、ここ数年、社会の風潮の変化などを背景に、人間関係づくりに悩む生徒が増えていくという。

そうした中でも、生徒が深い人間関係を築き、その良さを実感する機会となっているのが受験勉強だ。多

くの生徒が、放課後や土日も学校で勉強をするため、「一緒に頑張っている」という雰囲気生まれやすい。教師は「受験は団体戦」と伝え、生徒同士の連携を促している。例えば、質問に来た生徒には、「その内容は、Aさんが得意だから聞いてみるというよ」と言っておいて、教師はあえてその場では教えず、生徒の名前を出して、学び合いにつなげることもある。

「目標とする大学は違っても、支えたり、支えられたりする関係の中で深い絆が生まれます。後輩に向けて合格体験を話す時にも、他の生徒の存在が支えになったと話すと生徒は大勢います」（嶋先生）

生徒間に強い仲間意識が育つため、推薦入試などで先に合格を決めた生徒が、他の生徒を気遣い、フォローする姿も見られるという。

「入試本番は自分1人での戦いとなりますが、そこに至るまでは家族や友だち、教師など、多くの人の支えがあります。改めて考えると、受験は社会に出てからも求められる他者意識を養う上で、非常に貴重な経

験になるのだと思います」（清川先生）

### 密な情報交換により 全学年の教師が指導を共有

これらの生徒指導は、どのように教師間で共有されているのか。

1つには、綱領や重点指導事項の存在によって、教育活動の原則や最低限のルールの共有が徹底されていることが大きい。「こういう生徒を育てたい」というビジョンが明確なため、自ずと指導内容が収斂されていくわけだ。

日常的に教師間の連絡が密なことも強みだ。学年間では、学年主任同士がこまめに情報共有をして、目線を合わせている。

「学年によってカラーは多少違いますし、指導方法の細かい部分は異なりますが、情報共有によってお互いの良い指導を取り入れ合っています」（清川先生）

職員室は学年別のため、学年団では日常的にコミュニケーションを取っている。そのため、学年団で生

徒を育てるという意識が強く、教師は学年のほとんどの生徒の名前を覚えていて、生徒と教師が互いに知っているため、気付いたことがあれば、その場ですぐに指導している。

「学年の指導と学校全体の指導がほぼイコールのため、いずれかの学年に所属すれば、学校全体の方針を把握できます。他校から異動してきた教師も指導方針を共有しやすく、一貫した指導が可能になっていま

す」（嶋先生）

日々の生活や学習、進路、行事などについて深く考え、本気で取り組むことは、本来、「自分」のために他ならない。そこに「やらされている」という感覚があれば、成長のきっかけにはなり得ないだろう。同校は、そのことに気付かせることからスタートし、主体性を育む指導により、生徒が卒業後も人間的に大きく成長するための土台を築いている。

#### 卒業生の声



くすみほこ  
久住美法子さん  
東京大教養学部  
文科三類1年

#### 人とのつながりが成長を促してくれた

高校時代、行動の指針となっていたのが綱領でした。中でも「須く自重スヘシ」が好きで、今でも意味を考え続けています。以前は「謙虚にしろ」という意味かと思っていましたが、大学で新たな出会いを重ねる中で、相手の気持ちを考えて行動することの大切さを述べているのかなと考えるようになりました。綱領は、時代を超えた普遍的教えだと思っています。これからも自分の行動を綱領に照らし合わせて見つめ続けたいと思います。

高校生活は、周囲の人たちに支えられて過ごしてきましたが、特にそれを感じたのが受験期でした。先生方は「受験は団体戦」と度々話されていましたが、正直なところ、私は個人戦だと思っていました。しかし、受験本番が近付き、苦しくなるにつれ、友だちと勉強を教え合ったり、友だちが合格祈願のお守りを作ってくれたり、友だちの存在が大きくなりました。更に、授業で教わったことがない先生方からも「頑張っているか」と声を掛けていただくようになり、周りの人たちに支えられている自分がいました。試験場で机に座ると、友だちや先生方の顔が自然と浮かび、「今、みんなも他の場所で頑張っているんだ」と思うと勇気が湧いて、全く緊張せずに試験に臨めました。帰りの新幹線の中で、「これが団体戦ということか」としみじみと感じたことを思い出します。

八戸高校での3年間は、学習だけではなく、友人関係や学校行事など、さまざまなことが本当に充実していた日々でした。尊敬できる先生方や共に頑張る友だちなど、大勢の人とのつながりがあったからこそ、今の自分があるのだと強く感じています。大学や社会に出てからも、自分と相手が高め合えるような関係を築いていきたいと思っています。